



Title	＜書評＞「高齢化社会の設計」（古川俊之著，中公新書，540円消費税込）
Author(s)	むりわかオジサン
Citation	大阪公衆衛生. 1989, 56, p. 19-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83684
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『高齢化社会の設計』

古川俊之著（中公新書 540円消費税込）

読みたい本を捜すときに、著者が医者だと取り上げる優先順位を後回しにすることになっている。それは、病気のことや体の話が中心になり、内容がクライだけでなく、世間の人の関心や時代の流れにうといところに嫌気がさすからだ。

ところで、この著者も医者で、『近未来は老人受難期という説を粉碎、明るい老人社会を描く』というキャッチフレーズがなければ、ン読の棚ざらしになるところであった。

この本は、ユニークな内容の高齢化社会論を唱っている。つまり、『近未来の日本は扶養地獄で老人受難の時代だ』という説をデータによって批判・粉碎している。そして最後に「高齢者は次世代を育成し、文化の担い手たれ」と主張する。

まえがきに「若い人に読んでもらいたい」とあるので、著者よりもいくぶん若い読者として気になる点を記したい。

高齢化社会・長寿社会は『お婆さん社会』であると私は思う。この本では、そのことは余り考慮されていない。むしろ「老人勅諭」とか、経済構造の章ででてくるロビンソン・クルーソー・モデルなどは、この本がお爺さんを中心に論じていることを示している。

最近わが国には『一家に一人女の子は必需品』という流行語がある。その意とするところは「婦人にとっては貧弱な福祉制度やせがれなどは当てにはできず、わが娘が一番」ということだそうである。かくして日本の中年婦人は迫りくる老後を託すべく、そのわがままを許し娘を手なづけている。

こうした現状からすれば、著者の男性に対する呼びかけはやや迫力に欠けており、『近未来の日本は扶養地獄で老人受難の時代だ』という説の嘘をもっと徹底的に暴くことに力を注いでほしかった。（むりわかオジサン）